談話分析を基とした理解についての一考察

佐々木　雅剛

1．はじめに

コンテクスト上にない意味を捉えることは、簡単であるときとそうでないときがある。その文に対しての表だった意味を捉える事により、本文の指し示す意味が分かる。しかし、そこだけにとどまってしまうと本来筆者が指し示す意味が分からずに学習が終わってしまう。学習者が持っている背景知識（background knowledge）がどのように作用してくるかによって、コンテクスト上にはない、筆者が言わんとすべき意味が分かるのである。

本論文は談話分析（Discourse Analysis）をしていく上で、その背景知識となるスキーマ（schema）が働きかけることによってどのように理解が進むのか、ということについて論を進めていきたいと思う。

2．背景知識の働きかけ

下の文を見て、これがどういう意図によって書かれたか、ということが分かるのならば、持っている背景知識が働きかけている、ということがいえる。

Ms. Smith: O.K., class. Where's Singapore?

Koji: It's right here. Singapore is clean and green.

Ms. Smith: How do you know, Koji?

Koji: My uncle works there. I visited him this spring with my family.

Yuki: Oh, really? Was it hot?

Koji: Yes, it was. Some of the food was hot, too.

Ms. Smith: How long were you there?

Koji: For a week. I really enjoyed my stay, and I learned a lot.

(*New Horizon English Course 2:* 13)

中学校２年の英語の教科書なのだが、"hot"という単語がある種の「しゃれ」になっていることを学習者は気づくのであろうか？もちろん、これは大人の観点からのものであるのは言うまでもない。「暑いと「辛い」の意味を同じ単語で掛けていることに気づく生徒は少ないと思われる。そもそも、この時点で意味を細かに調べているとは言い切れない。英和辞典よりむしろ、教科書のAppendixについて

いる、単語の意味一覧などを参照して"hot"=「熱い（暑い）」と認識してしまう。つまり、学習がきちんとできずに途中で終わってしまった感じになる。とすれば、会話中でコウジが発した"Some of the food was hot, too."という文は「食べ物も熱かった。（=気温が高かった上に食べ物の温度も高かった。）」と解釈してしまう。日本語として意味が通るので間違いであるとは言い切れない。しかし、筆者が伝えたかった、「辛い」という意味とは違う、別の解釈に変化してしまう。背景知識の存在が重要なのである。また、揃っていないにしても、辞書で希望の意味が見つかってすぐに閉じてしまう学習法であっても、この意味は捉えられないのである。

スキーマは無意識のうちに働きかけ、理解を促進していく。逆に言えば、スキーマが活性化されないと、理解が困難になる。つまり、文の行間を読みとる（read between the lines）ことができないのである。

(in the room)
A: Oh ... Do you feel hot in this room?
B: Shall I open the window?
A: Yes, please.

上の会話で話者Aは「部屋の中暑くない？」と問いかけているのに対し、話者Bは「窓を開けましょうか。」と返している。話者Aは「部屋の中暑くない？」→（「窓を開けてくれないか？」）という意味を含めて発話している。一方、話者Bにしてみれば、「部屋の中暑くない？」→（「これは窓を開けてくれということであろう。」）→「窓を開けましょうか。」という経緯がある。括弧の中は実際の発話や書き言葉に出ない。発話の面から考えれば、これが無意識のうちに働きかけるスキーマである。また、書き言葉の観点から見れば、行間にこれだけの意味が隠されている。よって、会話であれば話者Aと話者Bの間に共通の理解が存在し、会話がスムーズに流れる。書き言葉だと、読み手が理解できるのである。

さて、背景知識の手助けによって見えない部分がわかってくる。Discourse Analysisと称されるところがここなのである。特に含みが多岐にわたる文に関しては、注意が必要である。話し手・利き手それぞれに共通する「何か」がなければ、会話は成立しない。つまり、会話自体が首尾一貫性（coherence）を持つ必要がある。これが欠けてしまうと、構成が全く意味を為さないものになってしまう。

A: Do you know that guy?
B: Of, course! He's Ken.

Aの問いかけに対し、Bに求められる答えは一般的にYes or Noである。この時点でBの返事はYesであると捉えることができる。というよりむしろ、知っていて当たり前という感じで答えている。では、以下の場合はどうか。

A: Do you know that guy?
B: Ken.

単にその少年が誰であるか、という問についての答えだけでも成り立つ。すなわち、焦点がその「少年」の名前になっているのである。焦点に準じた事に乗っ取っているので、会話として成立するのである。

Grice (1975) の「協調の原則 (co-operative principles)」によれば、会話は4つの基本構造から成り立っている。

Quantity: Make your contribution as informative as is required (for the current purpose of the exchange).
Quality: Do not say what you believe to be false.
Do not say that for which you lack adequate evidence.
Relation: Be relevant.
Manner: Avoid obscurity of expression.
Avoid ambiguity.
Be brief (avoid unnecessary prolixity).
Be orderly.

(Thomas, J. 1995: 63-64)

簡単にいえば、
「量」に関して、要求されたことに対して過不足なく答えよ。
「質」に関して、疑い深いことは言うな。信憑性に欠けることは言うな。
「関係」に関して、関連のあることを言え。
「規則」に関して、表現に曖昧さを避けよ。過不足なくはっきり順序よく言え。

この原則に則ることにより、会話がスムーズにながれていく、となっている。確かにその通りである。答えが非常に長すぎたり、関係のないことだったりすると、理解に苦しむどころか意味をなさない会話となる。

有名なCook, G(1990)の「騎士とパイナップル」の文を具体例として考えてみる。

A. The knight killed the dragon. He cut off its head with his sword.

B. The knight killed the dragon. The pineapple is on the table.

(Cook, G. 1990: 9)

AとBの文章でAは読んでみて意味が通る。しかし、Bの文章は疑問が残るであろう。訳してみると、「その騎士はドラゴンを殺した。」→「そのパイナップルはテーブルの上にある。」となる。意味が分かるだろうか。この２文はあまりに意味が飛躍しすぎていて、大意が捉えられない状態なのである。AとBの文それぞれについて分析を進めてみると、

A. The knight killed the dragon. He cut off its head with his sword.

この文で"He"は前半の文で出てきた"The knight"であり、"its"は"the dragon"を指し、"his"は"the knight"の持つ剣を指している。つまり、後半の文が前半の文の意味を受けて構成されているので、首尾一貫していて意味がとおるのである。言い換えれば、協調の原則でいう、「関係」について、関連付けられているといえる。

「その騎士はドラゴンを殺した。」→「彼（騎士）はその頭（ドラゴンの頭）を彼の剣（騎士が持っていた剣）で切り落とした。」

B. The knight killed the dragon. The pineapple is on the table.

この文で前半は全く同じ解釈ができる。では後半はどうか。「そのパイナップルはテーブルの上にある。」と解釈され、前半の文の意味と全く関係を持っていない。前半の部分で「騎士」と「ドラゴン」が新情報として与えられたのに対して、後半の部分で「パイナップル」が「テーブルの上にある」という情報が新たに与えられている。ということは、新情報のみが示されているため、話が全く先に進んでいないことになる。

一般的に会話などは新情報が与えられてからそれに基づく情報（新情報から旧情報）に移り変わることによってスキーマが活性化されて解釈が進んでいく。ここに書き言葉上には現れない意味が存在しているのだ。Discourse Analysisによってこれがはっきりとするのは新情報について次々とそれをサポートする情報が与えられていくからであって、全く関連性のないポイントだけのキーワードでは、解釈が困難になるのである。

ではどうすれば首尾一貫して意味が通るのか。やはり、与えられた情報を元にして、別の情報を加えていかなければ難しいことである。協調の原則にもあるとおり、過不足なく伝えることが重要なのである。

3．結論

結論として、Discourse Analysisにおいて重要なのは、「新情報」から「旧情報」への転換である。新情報が旧情報になることで新しい知識が背景知識へと変化して、スキーマが活性化していき、Discourse Analysisの手助けをしていくのである。理解において難しく考える必要はないのである。新情報に対して、その根底となる基礎を固める、すなわち新情報の周辺にある事柄を集めていき、理解を深め、さらに別の新情報に結び付けていく。これを繰り返すことによって会話などの流れを捉えることができるのである。

本論文は修士論文の要約で、スペースの関係上、かなり省略しているため、かなり大雑把に書いているが、機会があったらこれについてもう一度じっくりと研究してみたいと思っている。

References

Cook, G. (1989) *Discourse.* Oxford University Press.

Nunan, D. (1993) *Introducing Discourse Analysis.* Penguin Books.

Thomas J. *Meaning in Interaction.* Longman.

Asano, H. et al. (2000) *New Horizon English Course 2.* Tokyo Shoseki.

（岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修）